



国際観光市場の各国比較：その大きさと特徴

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅羽, 良昌 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00001056

国際観光市場の各国比較

— その大きさと特徴 —

浅羽良昌

1. はじめに

国際観光市場の各国別の大きさは、それぞれの国の国民による外国旅行者数、すなわち外国旅行の出発旅行者数によって決まる。外国旅行者の送り出し数の多い国が、国際観光市場として大きいことを意味する。反面、多数の外国人旅行者を迎え入れたい受け入れ国側からすると、この大きい魅力的な国際観光市場の国の国民を、いかに数多く集客、到着させるかが問われることとなる。

従来、外国人旅行者到着数の多い受け入れ国としてフランス、スペイン、アメリカそして近年とくに著しく伸びている中国に注目し検討がなされてきたが、送り出す側の多い国についての分析は必ずしも十分になされていない。上述の4ヵ国が世に言う観光大国とすれば、多数の海外旅行者を送り出している国もまたこれら観光大国を支える最大のサポーターであり、かつ観光大国と呼んでも差し支えあるまい。

本研究ノートは、これらの国の代表としてドイツ、イギリス、アメリカそして中国などに着目し、その数、すなわち国際観光市場の大きさとそれぞれの特徴を示すことにある。あわせてロシア、フランス、日本、さらに日本にとって重要な市場となっている韓国と台湾についても眺めてみたい。こうした問題設定の根底には、国際観光市場の大きいこれらの主要国から日本はいかに多数の外国人観光客を迎え入れたらよいか、との意識がある。

と同時に、本研究ノートは、国際観光マーケティングに必要なデータの提示・確認作業という側面もあわせもつ。ここで、利用する基本的な資料はUNWTO（世界観光機関）が公表しているものをベースにしている。UNWTOは、世界各国の外国人旅行者受入統計を、各国・地域が収集したインバウンド統計に基づいて提示しているが、この統計をベースにアジア太平洋交流センターがさらに逆集計することによって、主要24ヵ国・地域からのアウトバウンド統計である目的地別旅行者数を示している。これを主に利用したい。なお、アジア太平洋交流センターそれ自体がいみじくも明示しているように、この受入統計にはUNWTO

に提出する各国の統計資料のベースがいまだ統一されていないという欠陥をはじめ改善しなければならぬ諸問題がいくつかある。しかし、現時点にあっては、各国の海外旅行者数の大筋の規模を把握する上に不可欠な資料であることは疑いえない。

この数値の問題点については、とりあえず分析対象としているアジア太平洋交流センター『世界観光統計資料集』の注意事項を参照されたい。提示されたデータは絶対的なものとして捉えるのではなく、あくまでも相対的なものとして捉える必要のあることを念頭に置きながら検討したい。

2. 世界各国の国際観光市場の動向

世界各国の国際観光市場の大きさは、それぞれの国民の外国旅行者数で示される。各国による外国旅行者数の国際ランキングを掲載した表2-1をみられたい。参考までに訪問外国人旅行者数とそのバランスもあわせて表示した。2007年の数値であるが、ランキング外にあるタイの数値も記載した。この表をみるにあたり、次の3点に留意していただきたい。

表2-1 外国旅行者数の上位40ヵ国(2007年)

(単位：1000人)

順位	国	外国旅行者数(A)	訪問外国人旅行者数(B)	バランス(A)-(B)
1	ドイツ	70,400	24,400	46,000
2	イギリス	69,450	30,700	38,750
3	アメリカ	64,052	56,000	8,052
4	ポーランド	47,561	15,000	32,561
5	中国	40,954	54,700	-13,746
6	ロシア	34,285	<23,676>	10,609
7	イタリア	27,734	43,700	-15,966
8	カナダ	25,163	17,900	7,263
9	スロヴァキア	23,837	1,685	22,152
10	フランス	22,467	81,900	-59,433
11	ポルトガル	20,989	12,300	8,689
12	ハンガリー	18,471	8,600	9,871
13	オランダ	17,556	11,000	6,556
14	ウクライナ	17,335	23,100	-5,765
15	日本	17,295	8,300	8,995

16	メキシコ	15,089	21,400	-6,311
17	韓国	13,325	6,400	6,925
18	スウェーデン	12,681	5,200	7,481
19	スペイン	11,276	59,200	-47,924
20	ルーマニア	10,980	1,551	9,429
21	オーストリア	9,876	20,800	-10,924
22	インド	9,783	4,977	4,806
23	台湾	8,964	3,716	5,248
24	トルコ	8,938	22,200	-13,262
25	ベルギー	8,371	7,000	1,371
26	アイルランド	7,713	(8,000)	-287
27	デンマーク	6,564	(4,716)	1,848
28	香港	①6,141	③17,200	-11,059 ①-③
		②80,682		63,482 ②-③
29	シンガポール	6,024	8,000	-1,976
30	フィンランド	5,749	3,519	2,230
31	オーストラリア	5,462	5,644	-182
32	インドネシア	5,158	5,500	-342
33	ブラジル	5,141	5,026	115
34	サウジアラビア	4,817	11,500	-6,683
35	カザフスタン	4,544	3,876	668
36	エジプト	(4,531)	10,600	-6,069
37	ブルガリア	4,515	5,200	-685
38	南アフリカ共和国	4,433	9,100	-4,667
39	シリア	4,196	<5,430>	-1,234
40	アルゼンチン	4,167	4,562	-395
	タイ	4,018	14,464	-10,446

(注) ①は空路による外国旅行者数 ②陸路・空路による中国本土・マカオへの出境者を含む総数
③中国本土・マカオからの入境者を含む総数をさす。()は2006年、< >は2008年の
数値を示している。

(出所) 日本政府観光局 (JNTO) 『JNTO 日本の国際観光統計』各年版と『JNTO 国際観光白書』
各年版より作成。スロヴァキアとカザフスタンの訪問外国人旅行者数は、UNWTO, *Compen-*
dium of Tourism Statistics, 2009より引用。

第1に、香港の数値には①空路による外国旅行者数、②陸路・海路による中国本土・マカオへの出境者数を含む総数をそれぞれ記している。ここでは基本的には①の数値をベースに考察を進めていくが、②の数値を基準に考えると、香港がまぎれもなく世界一の外国旅行者数を誇る事となる。中国本土やマカオをそれぞれ一外国もしくは国内とみなすべきかどうか、議論のあるところであるが、さしあたり自由に往来できる香港人にとって両地域を旅行する旅行者を、国内旅行者とみることにする。いずれにしても、香港人が中国本土やマカオとの間を出入境する際、以前には香港側でパスポート審査を受けていたが、現在は身分証での往来に変わったこともあり、その数値はさらに伸びることが予想される。

第2に、中国の数値には香港の数値とは対照的に、香港やマカオとの出入境者も含んでいる。中国側から見れば、後述することであるが、出入境に際しさまざまな規制が依然として残っていることを考えると、両地域を国内というよりも国外として捉えることの方がむしろ現実的と思われる。

第3に、この表にはモンゴル、ベトナム、アラブ首長国連邦、マレーシア、チェコ、スイスそしてギリシャなどが記載されていない。とりわけ2004年には約3,665万人、約3,076万人の外国旅行者数をそれぞれ記録しているチェコとマレーシア、さらに2003年に約1,143万人を海外へ送り出しているスイスの数値が不明である。

チェコとマレーシアはいずれもベスト6位か7位に入るかどうかの微妙な数値に達していることを、頭の片隅にでも入れておいていただきたい。なお、チェコからの外国旅行者数が多いのは、後述するポーランドで指摘するように、1年未満の出稼ぎ労働者の出国者数も加わっている可能性のあることが原因かもしれない。

マレーシアのケースでは陸路でシンガポールへ渡航する旅行者数がこうした数値に押し上げている最大の要因である。両国の間では日帰り旅行も含め陸路で容易に訪問できることが日常化している。シンガポールが1965年、マレーシアから分離・独立した経緯からもおおよそなげよう。

1,000万人以上の外国旅行者数に達しているベスト20を地域的にみれば、ヨーロッパ14カ国、アジア・太平洋3カ国、アメリカ州3カ国となっている。中近東とアフリカの国は1カ国も入っていない。これに対し21位から40位に目を移すと、ヨーロッパ7カ国、アジア・太平洋6カ国、アメリカ州2カ国、中近東4カ国、アフリカ1カ国となっている。

外国旅行者を最も多数輩出している地域は、こうしてみてもヨーロッパであることは疑いえない。この地域に属する国々の多くが地理的にみて全般に陸続きに位置している上に、所得水準の高いことが外国旅行者数を押し上げている一因である。しかも多くの国が相互の国境で原則的に入国管理や検問を実施していないことが、出国者数をさらに伸ばす大きな要因となっている。日本のように、周囲を海に囲まれているような島国とは、およそ基本的条件

が異なっており、国境をまたいだ往来が日常化していることの証の数値といえる。

国別でみると、外国旅行者の最も多い国はドイツである。トップの座はこの10年間みても変わらず、ピークは2005年の7,740万人である。2000年以降一貫して7,000万台を推移しているが、ドイツの人口がおよそ8,270万人であるので、いかに多くの国民が海外旅行に出向いているかがうかがえる。なお、各国別の詳細については、次の章において論及してみたい。

2位はイギリスであるが、2006年以降限りなくドイツに迫ってきている。イギリスの人口はおよそ6,084万人である。しかも、この両国は訪問外国人旅行者数を大幅に上回る外国旅行者数を示しているところに特徴がある。外国旅行好き国民の代表といえる。

アメリカはベストスリーに絶えず入っているが、2001年の同時多発テロ事件の影響のもと、2003年のボトムを経て漸く若干ながら伸びはじめている。ただし、人口が3億223万人であることを考えると、ドイツやイギリス国民の外国旅行好きとは自ずから趣が異なる。

ポーランドも必ず上位に顔を出しているが、そのポーランド人が外国旅行先としてどこの国を選び、かつどこの国の旅行者がポーランドを訪れているか、これに関わる資料が現在のところ私の手元になく、これ以上の論評はできない。ただ考えられることは、東欧にあってチェコやハンガリーに次いで所得水準が高いことにくわえ、両国の人口の約3倍を有することや隣接した国が多いことも外国旅行者数をのばしている一因と思われる。さらに付言すれば、外国旅行者数の中に12ヵ月を越えない出稼ぎ出国者数も含まれている可能性があるということである。前述したチェコを含め東欧社会全般にみられる傾向と思われる。

なお、アメリカもポーランドもまた、ドイツやイギリスと同じく外国旅行者数が訪問外国人旅行者数を上回っているが、とりわけポーランドはその比率は3倍強に達し、ドイツとほぼ並んでいる。ただし、出稼ぎ出国者数がカウントされているとするならば、東欧における最も外国旅行好きの国民というのには躊躇せざるをえない。

5位にランクインしている中国からの外国旅行者数の増加の著しいことは、今や国際的に当該国の特徴となっている。2005年には3,000万人を突破し、2007年には4,000万人を若干ながら越えている。それでも訪中外国人旅行者数と比較すると、およそ約1,400万人が少なく、しかも人口が13億2,000万人を越えていることを考えると必ずしも多いとは言えないが、数十年後には予想だにできない数値に達していることだろう。

国際観光客到着数、すなわち訪問外国人旅行者数トップと2位を誇るフランスとスペインの外国旅行者数は、どの程度であろうか。フランスはベストテンに入っているが、ちょうど最下位の10位、スペインに至っては19位と好対照をなす地位となっており、その数は約2,247万人、約1,128万人にとどまり意外にも少ない。この数値は訪問外国人旅行者数の3分の1弱、5分の1強にすぎない。ドイツやイギリスとはまさに好対照な関係にある。

これらの両国よりも多数の外国旅行者を送り出しているイタリアも同じような傾向を示し、外国旅行者数は訪問外国人旅行者数の2分の1弱にすぎない。既述のアメリカや中国を含めこれら5カ国は、外国旅行者にとって魅力的な国の典型である反面、ドイツ人やイギリス人と比べ、とくにフランス、スペイン、イタリアの3カ国の国民は、全般に外国旅行への興味が少ない、あるいはその必要を余り感じていないのかもしれない。後述することでもあるが、観光資源に恵まれ、かつ気候が温暖な地理的状况がこうした結果をもたらしていると思われる。

ベストテン入りしている同じ東欧の一角スロヴァキアでは外国旅行者が多い一方、訪問外国人旅行者は極端に少なく、その差は約14倍に達している。ポーランドを大幅に上回る比率を示しているが、資料不足のため詳細については残念ながらわからない。ベスト20に拡大してみれば、ウクライナとメキシコは、上記のフランス、スペイン、イタリアの3カ国と同じトレンドに傾斜している。ウクライナの場合は、手元にある資料が少なく断定はできないが、かつて旧ソ連の一角をしめていたことから、分離・独立後ロシアをはじめ近隣の諸国からの親類・知人の訪問者が増えたことの反映と思われる。

ベスト40に拡大してみれば、オーストリア、トルコ、アイルランド、香港、シンガポール、インドネシア、サウジアラビア、エジプト、南アフリカ共和国にあっても類似のトレンドが見られるが、なかでもオーストリア、香港、サウジアラビア、エジプトの傾向はフランスやスペインやイタリアと近似している。なお、ランク外のタイも外国旅行者数約402万人に対し、訪問外国人旅行者数は3倍強の約1,464万人にも達し、アジアにおける同じタイプの代表国といえる。国際観光の旅行先として、これらの諸国はいずれも人気の高いことがうかがえる。

日本人の外国旅行者数は2005年以降1,700万人台を推移しているが、この数値ではベストテン入りするのはなかなか難しい。国際的にみて日本人の海外旅行者数は、もっと上位に顔をだしていると思われるが、島国日本からの出国のほとんどが空路に限定されていることもあり、今後とも一本調子で飛躍的に伸びることには限界があるように思われる。ちなみに、外国旅行者数は訪日外国人旅行者数のおよそ2倍強である。人口1億2,769人を抱える中での日本人外国旅行者数1,700万人台は、ドイツの数値7,000万人台と比較すれば余りにも少ない。ドイツの人口は既述した通り、8,200万人台である。

韓国の外国旅行者数はここ数年のうちに急上昇し、1,300万人台に達している。日本の人口の2分の1にも満たないことに鑑みると、韓国人の外国旅行者数は決して少なくない。ただし韓国も日本と同様、訪韓外国人旅行者数は余り伸びておらず、その数は韓国人外国旅行者数の半分以下である。韓国も日本とともに外国人旅行者をいかに迎え入れられるか、真価の問われる時が間近に迫ってきている。FIFA（国際サッカー連盟）サッカーワールドカッ

プをかつて両国で共催したように、ヨーロッパや南北アメリカを含む全世界に対し、両国はともに手を携えて共同で誘致宣伝活動をたてる必要があるかもしれない。国際観光客を多く送り出しているヨーロッパや南北アメリカ大陸からみて、日本や韓国は地勢的にみて余りにも遠く、かつ魅力的なビーチリゾートに必ずしも恵まれていない。観光ということに限定すれば、両国はアンラッキーな国といえるかもしれない。

ロシア、カナダ、ポルトガル、ハンガリー、オランダ、スウェーデン、ルーマニア、インド、台湾、ベルギー、デンマーク、フィンランドなどもまた訪問外国人旅行者数よりも外国旅行者数の方が多い。観光資源・気候風土そして所得水準のレベルなども微妙に関係していることと思われる。冬期における日照時間が短い寒冷地域では、全般に訪問外国人旅行者数よりも外国旅行者数の方が多い。寒い地域に住む人々が、太陽と海を有する気候温暖なビーチリゾートに向かって旅立って行く様相が垣間みえてくる。なお、ハンガリーとルーマニアは上述したポーランドと同様、外国旅行者数の中に稼働労働者の出国者も含まれている可能性のあることを想起されたい。

3. 各国別国際観光市場の大きさと特徴

国際観光市場の大きさを国別の外国旅行者数に焦点をあてて検討してきた。あわせてその数と訪問外国人旅行者数とを比較することにより、各国の特徴の概略の把握にも努めてみた。

ドイツ、イギリスそして日本は典型的に訪問外国人旅行者数を大幅に上回る外国旅行者数を世界に送り出している。他方、フランスとスペインそしてイタリアはこれら3ヵ国とは対照的に、訪問外国人旅行者を大量に迎え入れているにもかかわらず、自国の外国旅行者は全般に低位の数値にとどまっている。

アメリカでは外国旅行者数が訪米外国人旅行者数を上回るが、中国では逆に訪中外国人旅行者数が外国旅行者数を上回っている。ただし、両国にはドイツやフランスに典型的に見られるような著しい大きな落差は確認できない。UNWTOは中国、アメリカへの訪問外国人旅行者数は2020年には1億3,000万人、1億200万人に達し、それぞれ1位、3位になると予想しているが、これに対応して中国人ならびにアメリカ人の外国旅行者数は今後どのように推移するものだろうか。ドイツやイギリスを上回る外国旅行者を両国が近い将来送り出す可能性はあるのであろうか。

興味はつきないが、以下、現在にあって国際観光市場の大きい、かつそれぞれの特徴をもっている代表的なドイツ、イギリス、アメリカ、中国、ロシア、フランス、日本そして日本にとって重要な市場である韓国と台湾についてみてみたい。こうした巨大市場をターゲットに、いかに自らの魅力をアピールすることができるかどうか、日本をはじめ訪問外国人旅行者数

の少ない国にとっての課題はまさにここにある。

1) ドイツ人の外国旅行市場

2. で示したように、海外旅行者を最も多数送り出している国は西ヨーロッパに位置するドイツである。しかも表 3-1 に示した 2000 年以降のデータからみても明らかなように、ジグザグな道を辿りながら、たえず 7,000 万人台で推移していることを考えても、世界最大の国際観光市場である。2006 年には前年比でマイナス 8% を記録しているが、これは同年の FIFA サッカーワールドカップドイツ大会が開催されたことにより、同期間中の海外旅行を手控えたことも一因している。傾向としては、2005 年をピークに減少トレンドに転じ始めている。

表 3-1 ドイツ人の外国旅行者数

(単位：1000 人)

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
人数	77,400	76,400	73,300	74,600	72,300	77,400	71,200	70,400

(出所) 日本政府観光局 (JNTO) 『JNTO 国際観光白書』各年版と 『JNTO 日本の国際観光統計』2008 年より作成。

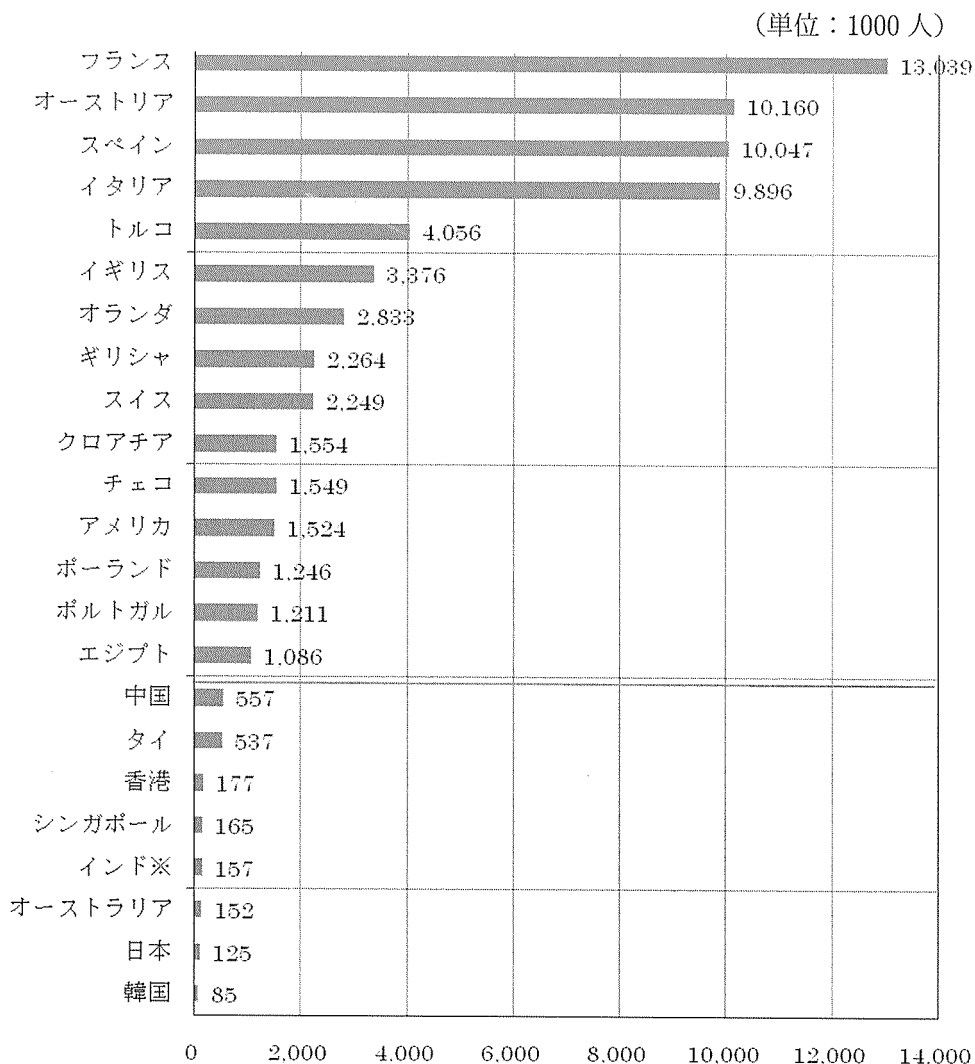
ドイツ人の目的地別旅行者数をみてみよう。統一的な数値として判明するのは 2002 年以降のことであるが、ここではスペースの関係上最も新しい数値を示した図 3-1 をみていただきたい。ランキング 15 位までと、日本を含む主要なアジア諸国への旅行者数も記載した。アジア諸国は日本の実質的なライヴァルである。

ドイツ人の外国旅行先として圧倒的に多い国は、ヨーロッパ域内に集中していることは一目瞭然であるが、なかでも同じ西ヨーロッパのフランス、オーストリア、南ヨーロッパのスペインそしてイタリアまでは 1,000 万人前後に達している。フランスがドイツ人の外国旅行地として断然 1 位を確保し、その数約 1,304 万人である。2002 年以降 1,300 万人台から 1,400 万人台を推移し、一際抜きでいる。

こうした数値は国境を接していることと無関係とはいえないが、逆にフランス人の外国旅行地としてのドイツの選択は、後述することであるが、意外にも少なく、10 分の 1 に満たない約 118 万人である。ドイツ人のフランスへの旅行人気が高いのと対照的に、フランス人のドイツへの旅行人気は必ずしも高くない。

フランスと同じく西ヨーロッパに位置し、しかも国境を接しているオーストリア、オランダやスイスなどへの旅行者も多い。太陽や海辺を有するビーチリゾート地として有名な南ヨーロッパのスペイン、イタリア、ギリシャそしてアドリア海に面したクロアチアへの人気が高

図3-1 ドイツ人の旅行目的地別ランキング (2007年)



※は2006年の数値

(出所) アジア太平洋観光交流センター『世界観光統計資料集』2009年より作成。

いことも注目される。なかでもスペインとイタリアの人気は際立っている。いずれも避寒リゾート地であるが、後者はさらに多数の歴史遺産があることとあわせ、ショッピングが人気の要因となっている。

なお、後述するイギリス人の外国旅行地と比較すれば、クロアチアと中央・東ヨーロッパのチェコそしてポーランドへの旅行人気の根強いことがうかがえる。地理的に近いこともあるが、かつて東ドイツが社会主義国としてこれらの諸国との交流が密であったことも関係しているはずである。欄外にあるが、同じく中央・東ヨーロッパのブルガリア、ハンガリーそ

してロシアへの旅行者も比較的多い。

ドイツ人の北ヨーロッパのイギリスへの旅行者は約 340 万人、イギリス人のドイツへの旅行者は約 210 万人であるので、ドイツとフランスとの間の極端なアンバランスはここでは見られない。

東・地中海ヨーロッパや中近東に位置する、比較的近隣地のトルコやエジプトへの旅行者の多いことは注目されるが、遠隔地にあっては北アメリカのアメリカへの人気は最も高い。ただし、その数は約 152 万人にとどまっており、イギリス人のアメリカへの旅行者数のおよそ 3 分の 1 にすぎない。

南アジア以東のアジアでは中国とタイへの旅行者が多い反面、それに続く香港、シンガポール、インド、日本さらに韓国への旅行者は少ない。中国とともに香港、日本、韓国は東北アジアに位置するが、なかでも日本と韓国は地理的に辺境にあることは間違いない。2006 年までは東南アジアのタイへの旅行者数は中国のそれをたえず上回っていたが、2007 年にはじめて逆転している。広大な国土と無数の歴史文化遺跡にくわえ、近年の経済成長に伴うビジネス関係の旅行者の急増が、こうした結果をもたらしたはずである。なお、シンガポールは東南アジア、インドは南アジアに属する。

アジアにおけるタイへの人気は一人ドイツ人のみならず、ヨーロッパの人々全般に根強いものがあるが、ヨーロッパにおけるスペインやフランスやイタリア、アメリカにおけるフロリダ州やハワイ州、日本における沖縄県のように、もっぱら避寒リゾート地としての評判が高いことによる。比較的手頃な値段でアジアの異国情緒を味得できることもその要因を形成しているはずである。たとえば、美しいビーチリゾート地をかかえる沖縄県がタイと同じように、ドイツ人をはじめヨーロッパの人々を呼び込むことができるものかどうか、旅行運賃を含む物価高そして輸送インフラの未整備、さらには誘致に向けての地道な努力など、解決しなければならない課題が山積している。

2) イギリス人の外国旅行市場

ドイツ人に次いで外国旅行者数の多いイギリスは、近年に至り限りなくドイツに近づき追いこそうとしている。表 3-2 をみられたい。2000 年と比較するとおよそ 1,300 万人の旅行者が増加していることを考えると、7,000 万人台で推移しているドイツと比べれば、トレンドとしては着実な増加傾向に傾いている。

イギリス人の目的地別旅行者数は図 3-2 が明らかにしてくれる。この図には、『JNTO 国際観光白書 2008 年版』（360 ページ）に掲載されている 2006 年のフランスへの旅行者数を追加・図示した。イギリス人の外国旅行先はドイツと同様、やはりヨーロッパ域内が 8 割近くをしめしている。なかでも 1 位のスペインと 2 位のフランスへの旅行者が圧倒的に多く、

表 3-2 イギリス人の外国旅行者数

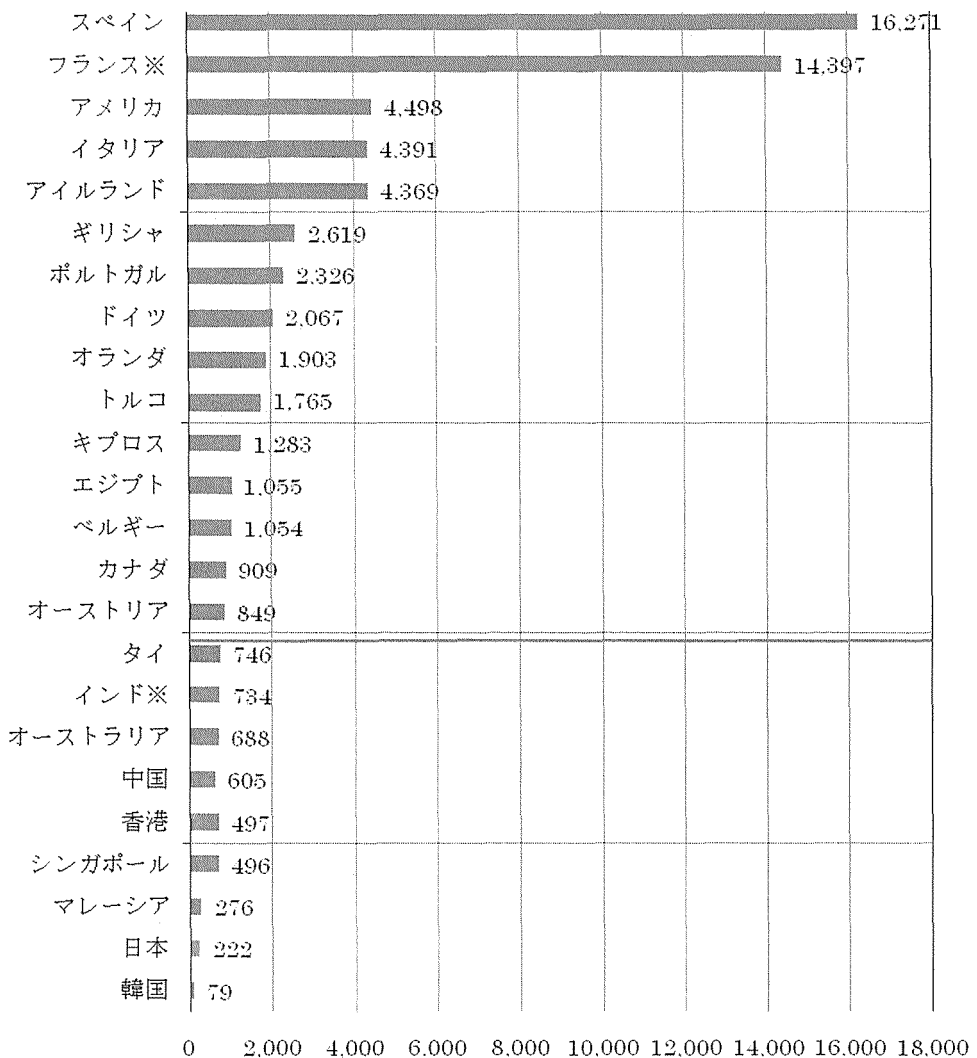
(単位：1000 人)

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
人数	56,837	58,281	59,377	61,424	64,194	66,441	69,536	69,450

(出所) 表 3-1 と同一。

図 3-2 イギリス人の旅行目的地別ランキング (2007 年)

(単位：1000 人)



※は 2006 年の数値

(出所) 図 3-1 と同一。

全体の4割を超えるシェアに達している。両国に続くアメリカとイタリアに次いで北ヨーロッパの 아일랜드への旅行者が多いのは、イギリスとアイルランドとの歴史的・地理的条件を考慮すればおよそ想像のできるどころである。

さらに比較的近隣の南ヨーロッパや東・地中海ヨーロッパのギリシャ、ポルトガルやトルコ、キプロスそして中近東のエジプトへの旅行者が多い一方、遠隔地にあってはアメリカへの人気はドイツと比べても断然高く、およそドイツの約3倍の旅行者がアメリカを訪れている。ヨーロッパの諸国にあつてイギリス人のアメリカ人気は際立っている。北アメリカのカナダへの人気も高く、ドイツ人のカナダ旅行者の約3倍を記録している。イギリス人のアメリカやカナダとの歴史的関係の深さが垣間みえてくる。

南アジア以東のアジアではタイ、インド、オーストララシアのオーストラリアそして中国と香港、シンガポールへの旅行者の多いのが注目されるが、日本や韓国への旅行者は伸びていない。ヨーロッパの人々にとっての中国とタイの人気は、ドイツの項目ですでに述べたように格別のようなものであるが、ドイツ人のアジア旅行の特徴と比較すれば、イギリス人旅行者の好みは歴史的環境からしてもインド、オーストラリア、香港、シンガポールへと向かっている。いずれもかつては植民地であった。

多数の外国旅行者を世界へ送り出している1位のドイツ、2位のイギリスからの関心・興味が日本へと注がれない状況は、地理的・歴史的条件を考えれば致仕方のないことかもしれないが、反面彼等の心をつかまえない限り、観光立国日本への道のりは遠くかつ険しい。

3) アメリカ人の外国旅行市場

2001年のアメリカ同時多発テロ以来、3年連続でアメリカ人の外国旅行者数は減少したが、2003年を底に緩慢ながら回復基調を辿り、2007年には過去最高の6,400万人台に達した。表3-3にその推移を示したが、ドイツとイギリスに次ぐ3位が2002年以降アメリカの指定席となっている。

表3-3 アメリカ人の外国旅行者数

(単位：1000人)

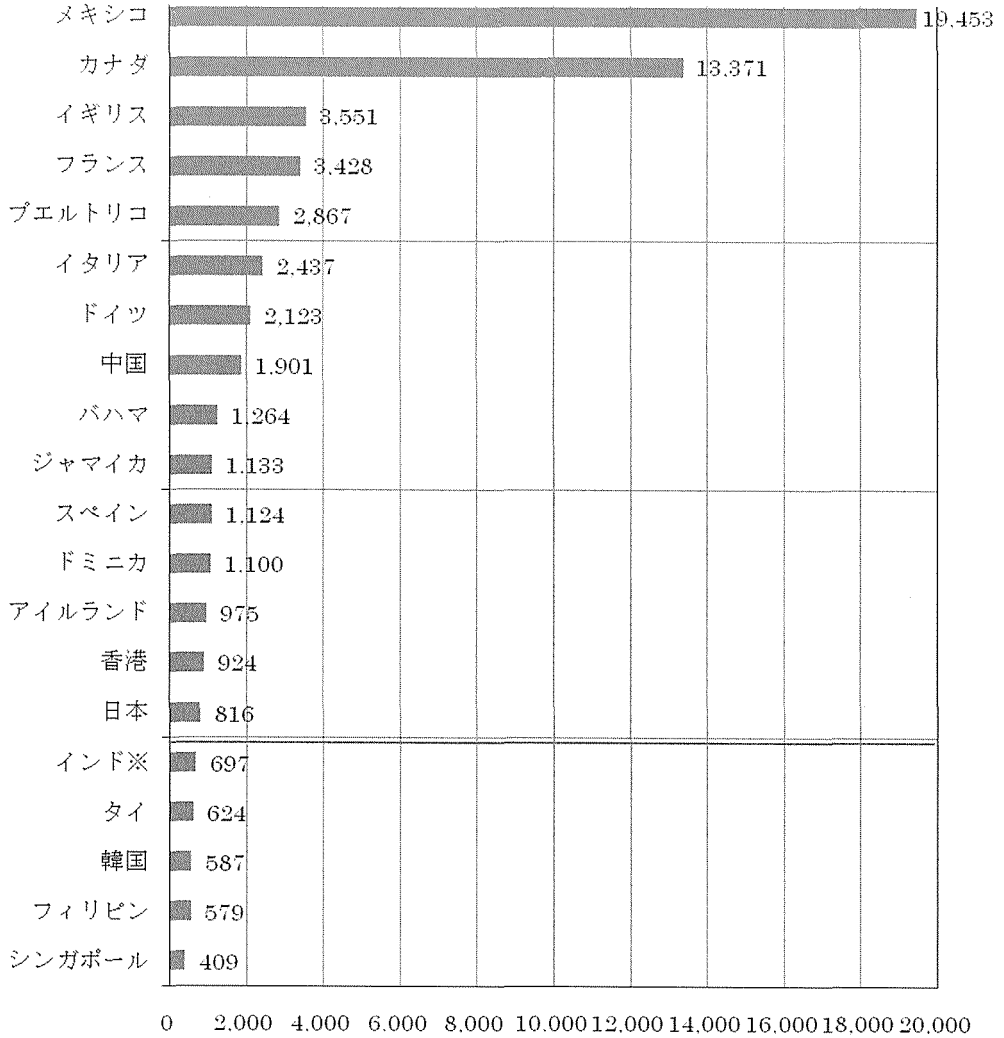
年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
人数	61,327	59,442	58,066	56,250	61,809	63,503	63,662	64,052

(出所) 表3-1と同一。2000-2002年は、U.S. Department of Commerce, ITA, *Office of Travel and Tourism Industries*, July 2004.

アメリカ人の目的地別旅行者数を、2007年のデータをベースに図3-3で表してみた。参考までに日本の当面のライヴァルとなるアジアのランキング外の主要国も追加した。

図3-3 アメリカ人の旅行目的地別ランキング（2007年）

（単位：1000人）



※は2006年の数値
 (出所) 図3-1と同一。

アメリカ人の外国旅行地トップと2位は、いずれも北アメリカ域内の隣接国のメキシコとカナダである。両国で全体の過半を若干上回っており、陸路・空路・海路を通じ、アメリカ人が多数メキシコとカナダを訪れている。メキシコへの旅行者数は2002年以降ほぼ横這いに推移しているのに対して、カナダへの旅行者数は漸次減少傾向にある。アメリカ人旅行者のメキシコ人気は根強いものがある。メキシコ系アメリカ人の里帰りや親類・友人訪問などの旅行が、こうした数値に押し上げているはずである。

地域的には同じくアメリカ州地域に属するカリブ海上のプエルトリコ、バハマ、ジャマイ

カそしてドミニカへは300万人弱から110万人弱の旅行者が訪問している。プエルトリコとドミニカへのアメリカ人旅行者は全般に増大傾向を示している中で、バハマとジャマイカへの旅行者はほぼ横這いか漸増の状況にとどまっている。

アメリカ州域外のヨーロッパに目をむけると、旅行者はイギリス、フランス、イタリア、ドイツ、スペイン、アイルランドへと向かっている。2002年と比較すると、フランスへの漸増、イギリスへの伸び悩みの結果、両国への旅行者数は350万人前後とほぼ同数となっている。イタリア、ドイツとともに、アメリカ人のこれら4ヵ国への人気は底堅い。

後述することでもあるが、フランス人のアメリカへの旅行者は100万人弱、その反対は343万人、イタリア人のアメリカへの旅行者も63万人、その反対が246万人といずれも低位にとどまっており、アメリカ人の両国への人気とは裏腹にフランス人やイタリア人のアメリカへの人気は意外と低い。既述したことでもあるが、ヨーロッパにおけるイギリス人のアメリカ人気は格別の感がする。

南アジア以東のアジアでは中国への旅行者が断然多く、日本への旅行者の2.3倍も記録している。しかも、中国への旅行者が年々着実に増加しているのに対し、日本への旅行者は2002年以降ボトムの66万人からトップの82万人とほとんど増加していない。日本をパススルーし、中国本土や香港へと向かうアメリカ人旅行者の姿がこの数値から見えてきそうである。

他のアジア諸国ではインド、タイ、韓国、東南アジアのフィリピンやシンガポールと続いているが、インドへの旅行者が比較的増加傾向を示していることは注目される。インドの最近における好調な経済を反映して、ビジネス旅行者の増大がこうしたトレンドを下支えしているはずである。

東・地中海ヨーロッパではイスラエルが53万人、中近東のトルコが38万人、東ヨーロッパではチェコが32万人、ロシアが29万人、南ヨーロッパではギリシャが38万人と、これらの地域への旅行者は全般に少ない。

4) 中国人の外国旅行市場

中国人の外国旅行者数は2000年と比較すると約4倍にも伸び、急ピッチで増加している。高い経済成長を反映して、しかもそれにあわせてさまざまな規制を課していた各国・地域への旅行を徐々に解禁したことが、こうした結果をもたらしたと思われる。表3-4は中国人の外国旅行者数の推移を示したものである。この間、2001年のアメリカ同時多発テロ、2003年の新型肺炎SARSなどに代表されるマイナス要因がいくつかあったにもかかわらず、一本調子で海外への旅行者数が伸びた国は、イギリスとともにむしろ珍しい。

表 3-4 中国人の外国旅行者数

(単位：1000 人)

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
人数	10,473	12,133	16,600	20,222	28,853	31,026	34,524	40,950

(出所) 表 3-1 と同一。

中国人の目的地別旅行者数ベスト 15 ヶ国と、ヨーロッパの主要国についてみてみよう。図 3-4 が参考になる。旅行先としては東アジア・太平洋地域にもっぱら集中しているが、なかでも東アジアに位置する香港とマカオへの訪問が断然・圧倒的に多い。香港とマカオで全体の約 3 割に達している。これらの両地域を外国としてもしくはあくまでも国内として取り扱うかどうかによって、大きな違いが発生してくるが、既述した通り、外国旅行者の中にこれら両地域への出境者を含めることにする。両地域への個人観光旅行が依然として中国本土における特定の都市に住む住民に限られていることからしても、国内旅行と同一に扱うことには今のところ無理があらう。

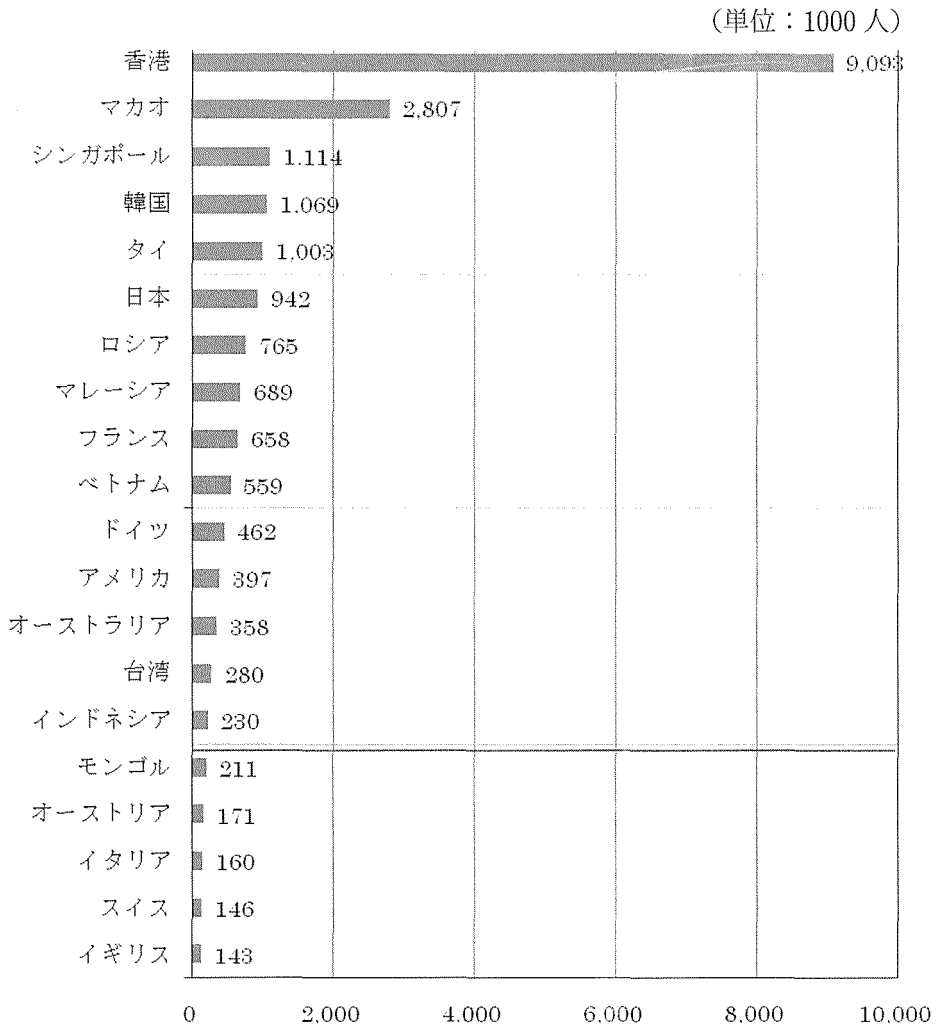
シンガポール、韓国、タイへの旅行者は 100 万人を越え、両地域に続いてベストファイヴに入っているが、その次に日本への旅行者が多い。中国人の外国旅行先としての韓国と日本とを比較すると、今、手元にあるデータでみると 1999 年以降一貫して韓国への旅行者数が日本への旅行者数を上回っている。現在のところ、大きな開きは見られないものの、今後中国人の海外旅行者がさらに爆発的に増加する可能性のある中で、似たもの同志の国にあってどちらの国が、中国人旅行者の心をしっかりとつかむことができるのだろうか。

両国にとってともに観光立国への近道は、中国人旅行者の動向にかかっていると言っても過言ではない。韓国に続いて日本もまた、2009 年 7 月から中国人観光客へのビザを個人旅行にも発行することが決定された。今迄は団体客だけが対象だったので、所得制限があるとはいえ個人ビザの解禁により、日本への旅行者の増加が期待される。

東北アジアに属する台湾への旅行者も、2008 年 7 月の中国本土への週末直行チャーター便の運航に加え、香港やマカオのように中国人の団体観光旅行が解禁されたことにより、中国人旅行者の飛躍的な伸びが予想される。日韓台の中国人旅行者ウェルカム競争の幕が切つて下された感がする。

東南アジアに位置するマレーシア、ベトナム、インドネシアそしてオーストラリアなど東アジア・太平洋以外の、いわば遠隔地にあたるヨーロッパでは南・北・西ヨーロッパのフランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、スイス、イギリスが続いている。フランスとドイツ以外への旅行者は余りにも少なくかつ伸びていない。これに対し、中央・東ヨーロッパのロシアへは同国が旧社会主義国であった関係とあわせ、地理的に隣接していることもあり、

図 3-4 中国人の旅行目的地別ランキング (2007 年)



(出所) 図 3-1 と同一。

日本に次いで中国人旅行者が多い。同じく東北アジアに位置するモンゴルへの旅行者は約 21 万人台にとどまっており、必ずしも多くない。

アメリカへの旅行者は 40 万人に届かない低位の状況にあるが、この間着実に増えている。しかも、2008 年 6 月にアメリカへの団体観光旅行が解禁されたことを踏まえると、ビジネス関係の旅行者も含め今後一層の増加が見込まれる。日本人のアメリカへの旅行者数約 350 万人に達するには、何年を要するのだろうか、考えるだけでもおもしろい。

5) ロシア人の外国旅行市場

中央・東ヨーロッパを代表するロシアの外国旅行者は、どのように推移しているだろうか。

表3-5をみられたい。2002年から2003年の低迷状況を除けば、石油、天然ガスなどの世界的な価格上昇に伴う著しい経済発展を背景に、富裕層による外国旅行が日常化したことがうなずける。あわせてソ連崩壊後独立した隣接国に住む親類や知人への訪問がひんぱんになったことが、ロシア人の外国旅行者数が比較的順調に伸展している要因である。2000年と較べれば2007年には2倍弱、数値にして約1,600万人の外国旅行者が増えている。2008年の金融危機からスタートした景気後退が、今後こうしたトレンドに歯止めをかけることになるものかどうか注目されるが、既述の中国やイギリスと類似の様相を一応呈している。

表3-5 ロシア人の外国旅行者数

(単位：1000人)

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
人数	18,371	18,030	20,343	20,572	24,507	28,416	29,107	34,285

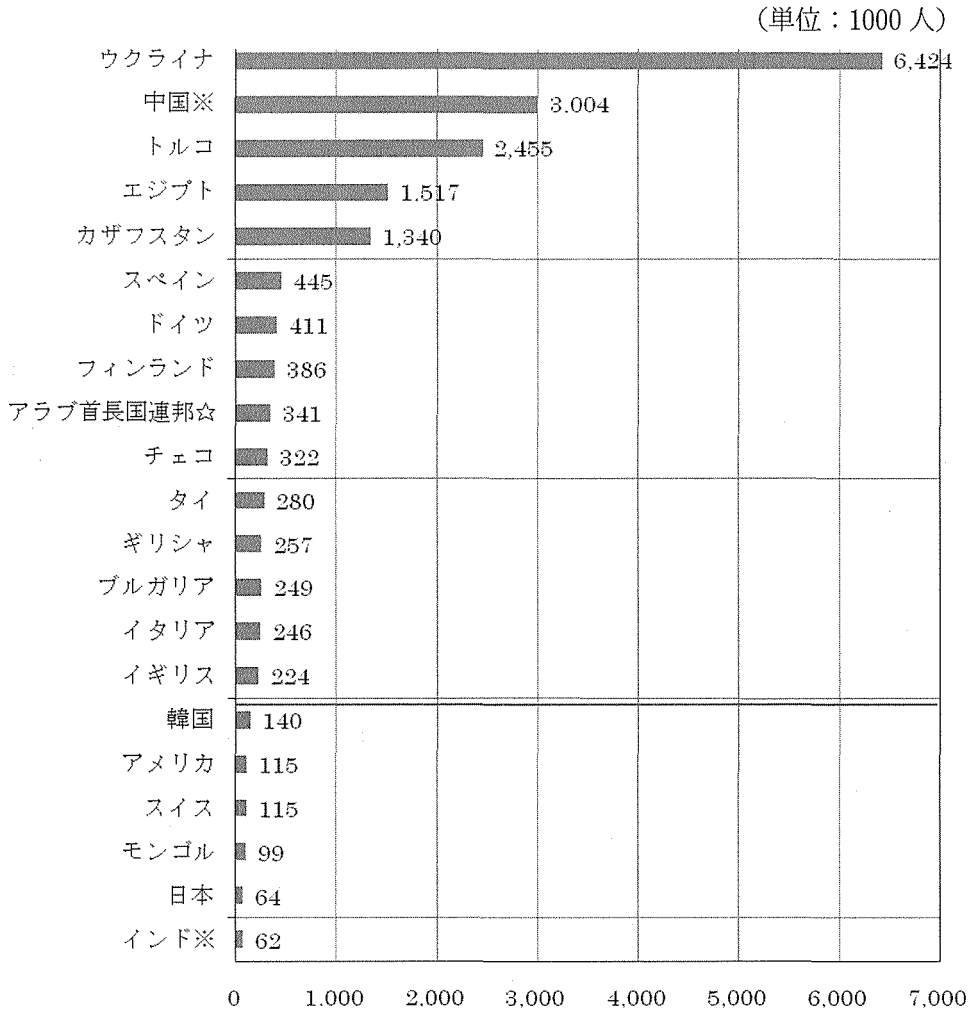
(出所) 表3-1と同一。

ロシア人の目的地別旅行者数を次に概観することにより、どこの地域・どこの国へと旅立っているかを見てみよう。図3-5が参考になる。ヨーロッパ、なかでも中央・東ヨーロッパ諸国への集中が際立っている。ウクライナ、カザフスタン、チェコ、ブルガリア、ポーランドなどへの旅行者が多いが、とりわけウクライナへの旅行者は断然群を抜いている。2006年の数字であるが、約642万人が訪れている。グルジアへの旅行者数が記載されていないのは不思議に思われるに違いないが、これは、ホテル及び同様の施設での国際観光客数からのみ算定した結果だからである。5,066人にすぎない。『JNTO 国際観光白書 2008年版』(413ページ)にしたがえば、約330万人が訪ねているとの報告がある。いずれにしても、かつてソ連として同一の国であったものが、それぞれ独立国となったため、親戚・知人訪問がこうした数値へと押し上げた最大の要因である。

中国と東・地中海ヨーロッパのトルコ、中近東のエジプトへの旅行者が次に多いことが、この国の特徴となっているなかで、中国へは観光旅行とあわせビジネス旅行が主体であろう。かつての社会主義国同志であったことにくわえ、隣接国であること、さらに最近の中国の経済成長がロシア人の中国旅行への増加へと拍車をかけている。なお、既述したことではあるが、中国からロシアへの中国人旅行者はわずか約77万人であるのに対し、ロシアから中国へのロシア人旅行者は約300万人に達しているため、その落差はかなり大きい。ロシア人の中国への魅力は一方通行の趣がするほどで、ともあれロシア人の中国旅行熱は限りなく高い。

東・地中海ヨーロッパのトルコやキプロス、南ヨーロッパのギリシャ、イタリアそして中近東のエジプトとアラブ首長国連邦への旅行者は、太陽と砂浜を求めリゾート地でヴァカンスを過ごしていることと思われる。スペインやイタリアそしてアドリア海に面したクロアチ

図3-5 ロシア人の旅行目的地別ランキング（2007年）



※は2006年の数値 ☆は2004年の数値

（出所）図3-1と同一。

アへの旅行もほぼ同じ目的であろう。富裕層の出現がこうした旅行を可能としているが、かつてのソ連時代には考えられない光景がみられ、今や状況は一変している。

ヨーロッパではスペインに次いでドイツへの人気が高いのは、かつての東ドイツとの関係であろうが、ドイツやイギリスと比較すると西ヨーロッパ諸国への旅行者は全般に少ない。北ヨーロッパのフィンランドへの旅行は、地理的・歴史的関係からしても多いのは当然のことであろうが、そのうち知人訪問のウェイトの高いことが、他の中央・東ヨーロッパ諸国への旅行と近似している。

遠隔地であるとはいえ、アメリカへの旅行者が余りにも少ないのは意外である。今後の動

向に注目したい。南アジア以東では絶対数ではドイツやイギリスやアメリカにはおよばないものの、やはりタイへの人気は根強い。韓国への旅行者も比較的多い一方、日本やインドへの旅行者は依然として少ない。

富裕層をはじめとしたロシアの人々が日本を訪れ、ショッピング、歴史遺産・温泉・街めぐり、グルメなどを楽しむ日はこないものだろうか。ルーブル高・円安の要因もさることながら、日本の観光魅力のアピールはことさら大切なことである。隣接国モンゴルへは日本やインドよりは若干多いとはいえ、10万人を切っており、近い国の割には旅行者は依然として伸びていない。

6) フランス人の外国旅行市場

世界一の数の訪問外国人旅行者を迎え入れているフランスの外国旅行者数は、すでに述べた通り、ヨーロッパの主要国にあって著しく少ない。さまざまな観光資源に恵まれ、わざわざ海外旅行へ行く必要がないのかもしれない。スペインやイタリアと並びフランスはヨーロッパにおける豊かな観光の恵みをうけたラッキーな国の代表格である。

まずは表3-6により2000年からの推移をみていただきたい。2000年から2003年、2005年から2007年にかけて停滞状況にあるが、それでもトレンドとしては漸増に傾斜している。この間の低迷は、アメリカ同時多発テロ、景気の後退さらにバリ島テロ事件などが複合的に影響した結果であろう。

表3-6 フランス人の外国旅行者数

(単位：1000人)

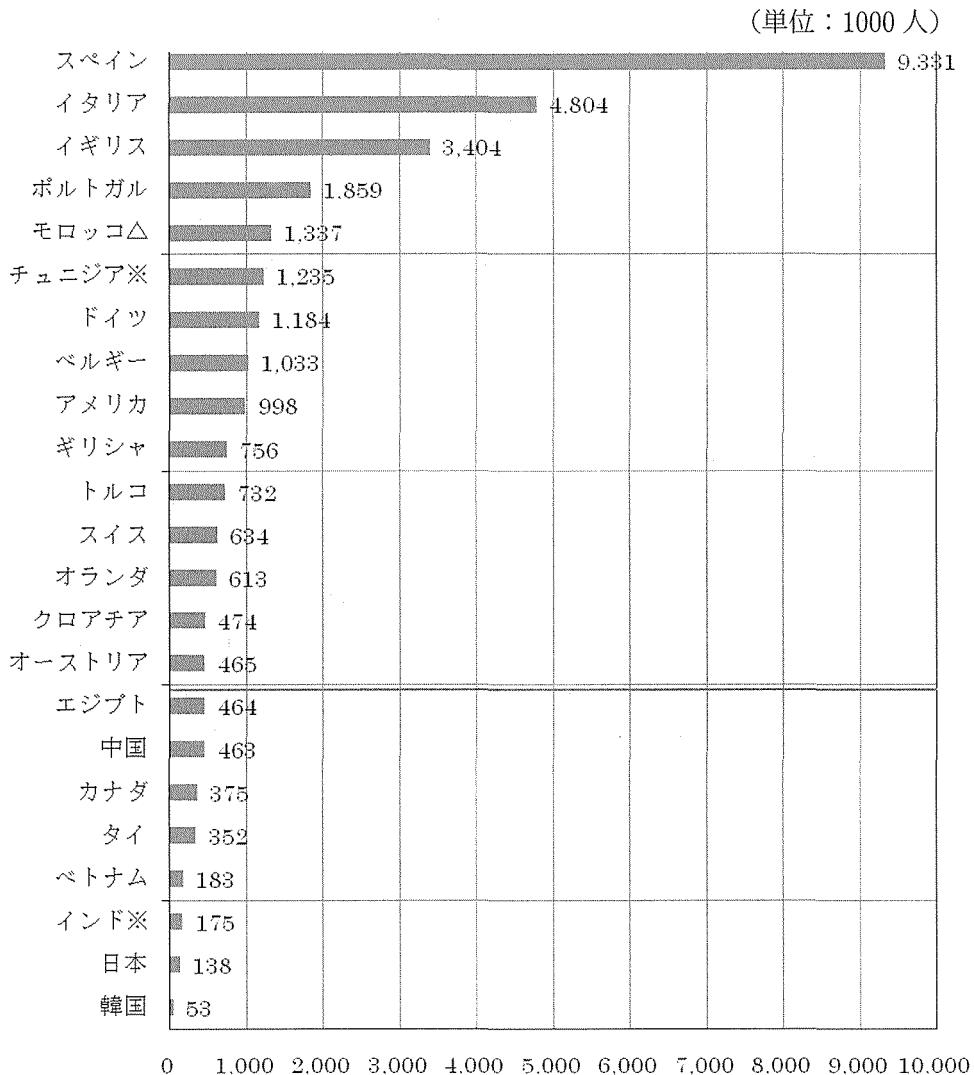
年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
人数	17,369	19,265	18,315	18,576	21,131	22,270	22,466	22,467

(出所) 表3-1と同一。

フランス人の目的地別旅行者数を図3-6で示したが、上位国とあわせ日本のライヴァルにあたるアジアの主要国についても追加してみた。フランス人の外国旅行先として圧倒的に多い国は、ヨーロッパ域内に偏っているが、なかでもスペインに一極集中している感がある。逆にスペイン人の海外旅行先として、最も人気のあるのも実はフランスであるが、その数は約547万人にすぎないことから、フランス人のスペイン旅行者数約933万人は確かに多い。

以下、イタリア、イギリスそして南ヨーロッパのポルトガルと続き、ドイツ人やイギリス人の外国訪問先とほぼ似たような様相を呈している。が、そのなかでもモロッコとチュニジアへの旅行者が120万人を超えているところにフランス人の特徴がある。

図 3-6 フランス人の旅行目的地別ランキング (2007年)



※は2006年の数値 △は2005年の数値

(出所) 図3-1と同一。

モロッコとチュニジアはともに地中海に面した北アフリカに位置し、美しいビーチリゾートを有していること、ヨーロッパ域外であるとはいえ、近接地であることそして両国はともにかつてフランスの植民地であったことなどが、多数のフランス人旅行者を引き寄せていると思われる。とりわけ旧植民地への旅行先としては、その他に北アメリカではフランス語圏ケベック州のカナダへ約37万人、アジアではベトナムへ約18万人が続いている。しかも、フランスは海外に依然として領土を抱えているが、カリブ海上に浮かぶマルチニークに約40万人、グアドループに約34万人(2005年)そしてアフリカ南東部マダガスカル東方にあ

るインド洋上の島レユニオンに約 28 万人が訪れている。これらフランスの海外県へはパスポートなしで身分証明書だけで自由に渡航できることが、旅行者数を伸ばしている要因である。

イギリスへの旅行者数は約 340 万人であるので、フランス人の海外旅行者数としては決して少なくないが、イギリス人のフランスへの旅行者数約 1,400 万人台と比較すると極端に少ない。フランス人のイギリス旅行熱は、イギリス人のフランス旅行熱ほどには熱く燃えていない。なお、アメリカへの旅行者数は 100 万人を切っており、しかもその伸びも必ずしも高くない。イギリス人のアメリカ旅行好きとは好対照をなしている。

ギリシャ、トルコ、クロアチアそしてエジプト（約 46 万人）への渡航者の多いことは、他の主要ヨーロッパ諸国と類似のトレンドに傾いている。

南アジア以東にあっては中国とタイへの人気が高く、ベトナム、インド、香港そして日本が続いている。日本への旅行者数は 2002 年と比べ 2007 年には約 5 万人ほどが増加しているとはいえ、絶対数としては低位にとどまっている。日本文化をさらにアピールする工夫が、ビジネス関係旅行者の増加とあわせ訪日フランス人旅行者の伸びに直結するに違いない。韓国へのフランス人旅行者は、さらに日本を下回っている。フランス人はもとよりヨーロッパ人旅行者の日韓へのこの冷めきった旅行心理を暖める共同企画の必要が、緊急を要する課題と提言するのは、以上の状況に鑑みれば、至極当然のことではないだろうか。

7) 日本人の外国旅行市場

日本人の外国旅行者数は表 3-7 に示したように、今迄に述べた国と比較するとかなりジグザグな数値を示している。表 3-7 を見られたい。日本人の海外旅行者数のピークが日本史上 2000 年であるので、2007 年に至っても、今なおそのピーク時の数値に若干とはいえ及ばない。この間、2001 年のアメリカの同時多発テロ、2003 年のイラク戦争そして新型肺炎 SARS の感染拡大の影響、さらには日本自体の景気低迷も加わり、2003 年にはボトムを記録している。その後、回復基調を辿っているとはいえ、1980 年代から 90 年代前半にかけて経験したようなほぼ一本調子の海外旅行者の増大はみられない。

それでは、日本人は外国旅行先としてどこの地域・国を選んでいるのであろうか。図 3-7 により日本人の好みがかがえよう。ランキング 15 位までとあわせて主要な国について記

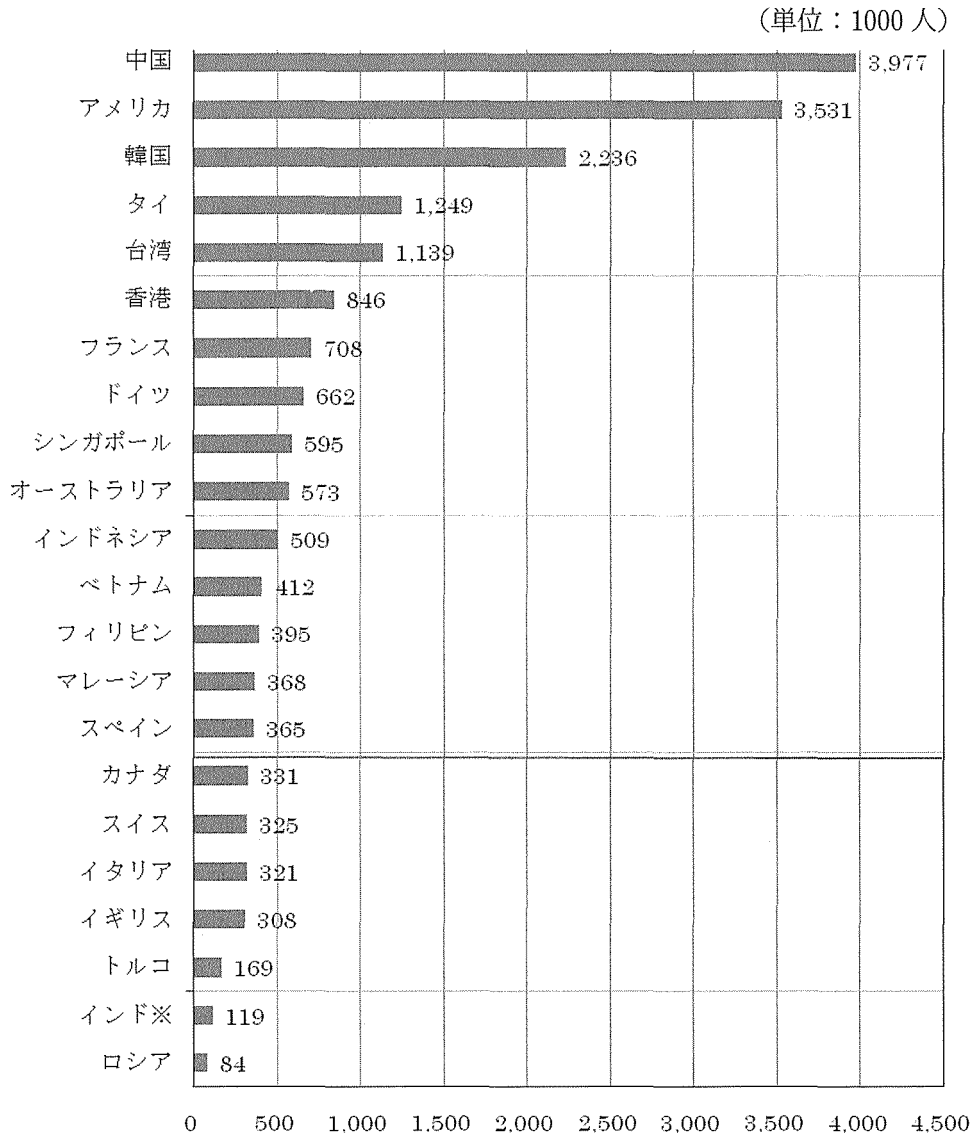
表 3-7 日本人の外国旅行者数

(単位：1000 人)

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
人数	17,819	16,216	16,523	13,296	16,831	17,404	17,535	17,295

(出所) 表 3-1 と同一。

図 3-7 日本人の旅行目的地別ランキング (2007 年)



※は 2006 年の数値

(出所) 図 3-1 と同一。

載してみた。

2007 年のトップは中国である。前年までは太平洋上に浮かぶハワイ州を含めたアメリカへの旅行者数が長い間、首位をしめていたことを考えると隔世の感がある。貿易取引においても中国がアメリカのウェイトを上回ったことに鑑みると、モノもヒトも中国へと向かう傾向に歯止めがかからないのかもしれない。まして近年の日本人の海外旅行先としては、お金

を余り使わずに遠距離よりは近距離の旅行地を選ぶことが主流になりつつあるので、首位逆転はその証なのかもしれない。ビジネス関係の旅行者の増加もまたこうした傾きに貢献しているはずである。

なお、既述した中国そして後段において明らかにする韓国と台湾にしても、彼等のアメリカへの旅行者数は日本人のアメリカへの旅行者数と比較すると極端に少ない。日本人の異常ともいうべきハワイ州人気に対し、3ヵ国の国民のハワイ州への人気は極めて低いことと大きくかかわっているとはいえ、日本人のアメリカへのあこがれはむしろ痛々しいほどに大きい。この点については、拙著『日本が支える観光大国アメリカ』第7章を参照されたい。

中国とアメリカに続くのは韓国、タイ、台湾そして香港であり、およそ予想される国々・地域が上位に並んでいる。

遠隔地のヨーロッパではフランスとドイツへの人気はもっぱら抜きんでて高く、以下、スペイン、スイス、イタリア、イギリスと続いている。フランスやドイツからの日本への旅行者数がともに約14万人、約13万人にとどまっているのに対し、日本からフランスへの旅行者数はその5.1倍、日本からドイツへの旅行者数は5.3倍にも達していることを考えると、限りなく日本出発の一方通行であることは間違いない。アメリカの場合は4.3倍、中国の場合は4.2倍であり、ともに類似のパターンを示している。せめて夢のまた夢かもしれないが、韓国と台湾のケースのように、ほぼ双方通行の旅行状況にしたいものである。ところで、意外なことにイギリスへの日本人旅行者の数は少ない。短期語学研修の旅行者も含め、もう少し多数にのぼるかと思っていたが、低位にとどまりしかもほとんど伸びていない。イギリス人の訪日旅行者数はヨーロッパの中であって一番多く、約22万人の7位であることを考えると、不思議である。ちなみに、訪日フランス人旅行者数は11位、訪日ドイツ人旅行者数は12位にとどまっている。訪日アメリカ人旅行者数は韓国、台湾、中国に続いて4位である。

下位にあってはベトナムとマレーシアへの旅行者数が順調に伸びているのに対し、フィリピンへの人気は低迷状態にある。マカオへの旅行者数は約30万人弱と、いまだ絶対数としては少ないものの、2003年以降急上昇し、いずれベスト15入りは時間の問題と思われる。

こうしてみると、日本人の海外旅行先としては、アジア地域が大きなウェイトをしめているとはいえ、前述の中国そして後述する韓国や台湾と比較すると、アメリカそしてヨーロッパへのウェイトの高いことが、日本の特徴といえそうだ。日本人旅行者のアメリカやヨーロッパへの指向は、国際観光の面においても鮮明にみられるパターンである。

8) 韓国人の外国旅行市場

日本と同じく東北アジアに属し、しかもともに辺境に位置する韓国の人々は、ヨーロッパ

のドイツ人やイギリス人と同様、外国旅行への需要が高いようだ。まして韓国の国土面積が日本の約4分の1程度にとどまっていることも、日本人以上に海外旅行へと向かう要因と思われる。人口に対する外国旅行者数の比率が日本以上に高いことは、周知の事実となっているが、2007年のデータでみると、日本の13.5%に対し韓国が27.1%を記録している。

まずは表3-8により、2000年より2007年に至る外国旅行者数の推移を概観してみよう。2003年の新型肺炎SARSの流行時期を除けば、外国旅行者数は一貫して増加を続けている。2005年にはじめて1,000万人の大台を越えるも、一服することなくさらに増加傾向に傾斜し、2007年には1,332万人と過去最高を更新している。2008年の金融危機に端を発した景気後退・大不況は、こうした韓国の海外旅行ブームに水をさすものかどうか、注目される。

表3-8 韓国人の外国旅行者数

(単位：1000人)

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
人数	5,508	6,084	7,123	7,086	8,826	10,080	11,610	13,325

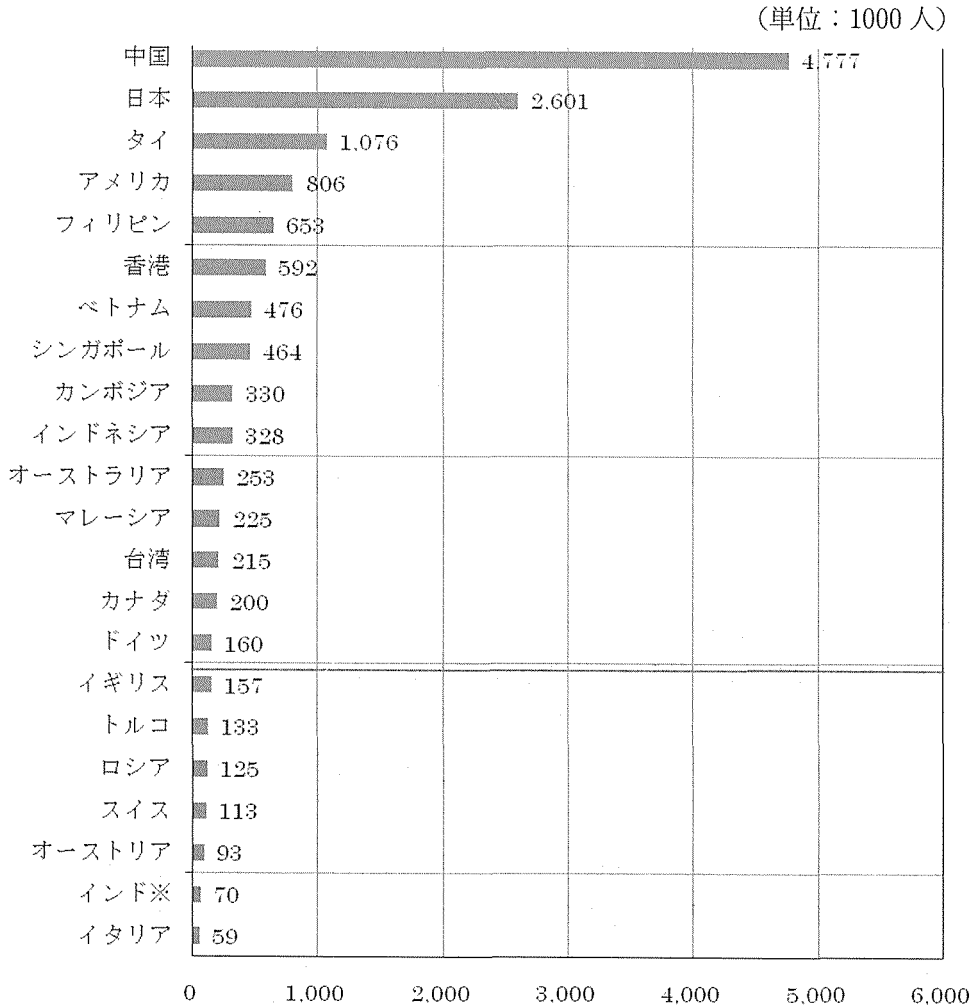
(出所) 表3-1と同一。

韓国人の外国旅行先としては、それではどこの国を選択しているのだろうか。図3-8をみていただきたい。ベスト15と主要国を記載してみた。お隣の国・韓国の海外旅行者の好みは、どのあたりにあるのだろうか、受け入れ国側の日本としては中国人や台湾人と並んで、彼等の動向が何よりも気になる。これら3ヵ国は、訪日外国人旅行者数の多い御三家であり、そのうち韓国人が断然トップの位置をしめているのだから尚更である。今や日本にとって最大のお得意様である。

ところで、韓国人の海外旅行先の首位は中国である。2002年には200万人をわずかに越える数であったのが、2007年には2倍をはるかに上回る約480万人に達している。次に日本であるが、およそ260万人である。この数値は2002年には約130万人弱であったので、ちょうど2倍に相当する。今後、中国と日本への韓国人旅行者数の差がさらに拡大するものか、縮小するものか予断を許さない状況にあるが、中国の広大な国土面積と歴史文化遺産の多さ、さらにはビジネス関係旅行需要の増大などを勘案すると、どうしても日本にとって不利となってくる。せめた洗練された都市文化とあわせ南の島沖縄の魅力などを存分にアピールする工夫が一際求められよう。日本よりも比較的寒い韓国では、美しいビーチリゾート地への人気は潜在的に高いはずである。

日本に続くのがタイである。ヨーロッパはもとよりアジアの人々にとってもタイの人気は根強くかつ高い。ただし、韓国の場合、大きな伸びは余り見られず、むしろ分散化の傾向が

図3-8 韓国人の旅行目的地別ランキング (2007年)



※は2006年の数値
 (出所) 図3-1と同一。

読み取れる。以下に続くフィリピン、香港、ベトナム、シンガポール、カンボジア、インドネシア、オーストラリア、マレーシア、台湾がその対象国となっている。カンボジアは東南アジアに位置する。その中で、フィリピン、香港、ベトナム、カンボジア、マレーシア、台湾への伸びは著しい。

遠隔地にあたるアメリカへの旅行者数は4番目であるが、その数は日本人のアメリカへの旅行者数の4分の1以下である。すでに述べたところであるが、日本人のアメリカへの地域別旅行先がハワイ州に集中しているのに対し、韓国人のそれはカリフォルニア州とニューヨーク州へと向かっている。比較的近いハワイ州への両国における人気の差が、所得水準の低さ

とあわせこうした違いを発生させている一因と考えられないだろうか。

ヨーロッパでは韓国からドイツへの旅行者数は約16万人、イギリスへは約15万7千人にとどまっている。日本からドイツへの旅行者数は約71万人、イギリスへは約31万人に達している。韓国人のヨーロッパへの旅行者数はまだまだ少ない。韓国人よりも日本人の方が全世界へと旅行の範囲が広がっている。ただし、ロシアへの韓国人の旅行者数は約12万人に達し、日本人のロシアへの旅行者数約8万人を上回っている。大きな差があるとまでは言えないが、地理的な関係が影響しているのであろうか。東・地中海ヨーロッパのトルコへは約13万人の旅行者が訪れており、しかも着実に増加していることから、今後は日本と同様、地域・国への一層の拡大がみられるかもしれない。

こうしてみると、韓国人の海外旅行先としては断然・圧倒的にアジアに傾斜しており、とりわけ中国と日本への集中が顕著である。さらに日本と比較すると、アメリカやカナダそしてヨーロッパへの旅行者が依然として少ないところに、韓国人の海外旅行先の特徴がうかがえる。

9) 台湾人の外国旅行市場

台湾人の外国旅行者数は2007年にも過去最高を更新続けたにもかかわらず、ここで取り上げた国にあっては最も少ない約900万人弱である。ただし、台湾人の訪日旅行者数は約139万人に達し、韓国人に次いで多いことから、彼等の旅行先の推移に目をとめておく必要はあろう。

ところで、台湾は日本や韓国と同様、台湾人の海外旅行者数の割には訪問外国人旅行者数は少ない。訪台外国人旅行者数は約372万人にとどまっている。これらの数値は、台湾人の外国旅行熱の高いことを裏付ける証となっているが、人口に対する外国旅行者数の比率からみてもそのことが判明する。既述した日本の13.5%、韓国の27.1%を上回る38.7%を記録している。

人口は約2,318万人、韓国の約4,909万人、日本の約1億2,769万人と較べかなり少ないにもかかわらず、約900万弱の旅行者を海外へ送り出していることは驚きである。その理由の一つとして、台湾の土地面積は韓国よりもさらに狭く、ほぼ九州に匹敵する程度であることから、旅行といえども海外へと出掛ける志向があげられる。勿論、さらに面積の狭小な香港やシンガポールほどではないが、人々の海外旅行にたいする関心の高さは、所得水準の上昇とあわせこんなところにあるのかもしれない。

台湾人の外国旅行者数の推移を表3-9でみれば、次の通りである。2001年のアメリカ同時多発テロ、2003年の新型肺炎SARSの流行、とりわけ後者の影響の甚大さは数字の上で鮮明に表れているが、その2003年のボトムを契機として、その後海外への旅行者数は確実

表 3-9 台湾人の外国旅行者数

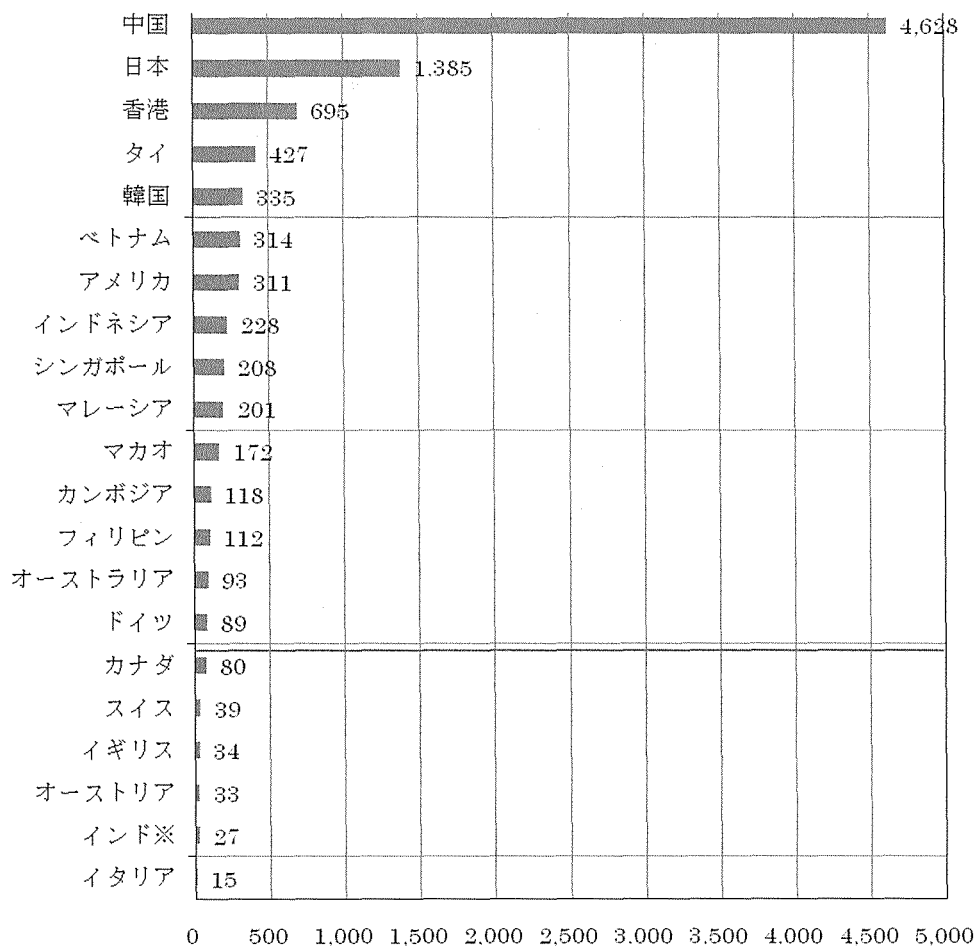
(単位：1000 人)

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
人数	7,329	7,189	7,319	5,923	7,781	8,208	8,671	8,964

(出所) 表 3-1 と同一。

図 3-9 台湾人の旅行目的地別ランキング (2007 年)

(単位：1000 人)



※は 2006 年の数値

(出所) 図 3-1 と同一。

に伸びている。2003 年からみれば 2007 年にはおよそ 300 万人の増加がみられ、外国旅行人気の復活・回復が定着していると言える。

それでは次に、台湾人の外国旅行先を図 3-9 でみてみよう。台湾人の外国旅行先は圧倒

的に東アジア・太平洋地域に集中していることがわかる。ベスト 15 のうちアメリカとドイツ以外はすべてこの地域に集まっている。最も多いのは中国本土である。2002 年と比較してみれば、およそ 110 万人が増え、2007 年には約 463 万人へと伸び、全体の 52% にも達している。これに香港の約 69 万人、マカオの約 17 万人をくわえると、61% へと拡大している。同じ中国語圏の安心感が飛行時間の短さや、食事が口に合うという要素とともに、このような圧倒的なシェアへと引き上げたはずである。なお、前述したことであるが、2008 年 7 月 3 日、中台間で週末チャーター便の運航がスタートしたことからも、今後益々中国大陆へと向かう台湾人旅行者の数は増えるに違いない。

中国に次いで多いのが日本、香港、タイ、韓国、ベトナムであり、その中で日本への旅行者数は確実に増え続けている。2002 年の約 88 万から 2007 年の約 139 万への増加は、台湾人旅行者の日本人気を反映している。反面、タイへの旅行者数は減少の一途を辿っている。2002 年と比較すると、2007 年には 24 万人程が減っている。これに対し、香港やベトナムへの旅行者数は確実に増え続けている。アジアにおける分散・拡大化の様相が一部うかがえる。

遠隔地アメリカへの旅行者数は約 31 万人と意外と少なく、しかも 2002 年と較べてもほとんど伸びていない。韓国人と日本人の訪米旅行者数約 81 万人、約 353 万人と比較してもはるかに少ない。日本や韓国と較べれば人口の少なさとあわせ所得水準の低さもこうした結果を映し出している一要因であろうか。ちなみに、中国人のアメリカへの旅行者数はすでに述べたように約 40 万人とやはり少ない。

ところで、訪米台湾人旅行者の地域別州をみれば、圧倒的にカリフォルニア州に多く、以下、ニューヨーク州とネヴァダ州が続いている。前掲の拙著『日本が支える観光大国アメリカ』第 7 章をみられたい。訪米日本人旅行者のハワイ州への顕著な集中はここではみられず、この傾向は若干の違いがあるとはいえ、訪米韓国人・訪米中国人旅行者にもみられる。同じアメリカにあって比較的安く・近いハワイ州へと出向いていないことは、アメリカへの台湾を含めたこれらの国々の国民の旅行者数が意外と伸びていない一因かもしれない。

ヨーロッパではドイツを筆頭にスイス、イギリス、オーストリアへと続いているが、絶対数としてはカナダを含めいづれも 10 万人に達していない。世界への拡散は韓国人の旅行者と比較しても全般にさらにみられない。

こうしてみると、台湾人の外国旅行先は、韓国人の外国旅行先とかなり類似のトレンドを示し、ヨーロッパや北米大陸への分散・拡大がみられないままに、東アジア・太平洋地域に一極集中していることが看取できる。あえて韓国との相違点をさがせば、中国語圏の中国本土、香港、マカオへの集中が台湾にあってはより一層鮮明にみられるところであろうか。

4. むすび

以上、各国別の国際観光市場の大きさとその特徴について明かにしてきた。国際観光市場の大きい1位と2位のドイツとイギリス、さらに13位の日本などは、訪問旅行者数を大幅に上回る旅行者数を海外へ送り出す一方、訪問旅行者数の多い1位と2位のフランスとスペインは、逆に海外への旅行者数は意外と少なく、国際観光市場の狭いことが判明した。フランスは10位、スペインは19位といずれも低位にとどまっている。

アメリカと中国はいずれもこれら5ヵ国ほどの落差はみられないままに、国際観光市場の大きさとしては3位と5位につけている。所得水準のレベル、地理的環境に左右される自然の神の恵み、歴史・文化遺跡の有無、国土面積の大小、テーマパークやカジノを含む総合リゾートの独自の開発・創造力の存在などが、各国におけるこうしたそれぞれの特徴を生み出したはずである。

訪問外国人旅行者数の極端に少ない日本をはじめとした国々は、国際観光市場の大きいこれらの諸国の国民に何を訴え・何をアピールしたらよいものか、待たなしの対応が迫られている。

参考文献

UNWTO, *Compendium of Tourism Statistics*, 2000-2009.

UNWTO, *Yearbook of Tourism Statistics*, 2000-2009.

U.S. Department of Commerce, ITA, *Office of Travel and Tourism Industries*, 2000-2009.

日本政府観光局 (JNTO) 『JNTO 国際観光白書』各年版。

日本政府観光局 (JNTO) 『JNTO 日本の国際観光統計』各年版。

国土交通省編 『観光白書』各年版。

アジア太平洋観光交流センター 『世界観光統計資料集』各年版。

岐部武・原祥隆 『やさしい国際観光』国際観光サービスセンター、2006年。

浅羽良昌 『日本が支える観光大国アメリカ』昭和堂、2008年。